

新宮川水系（熊野川）河川整備計画の策定

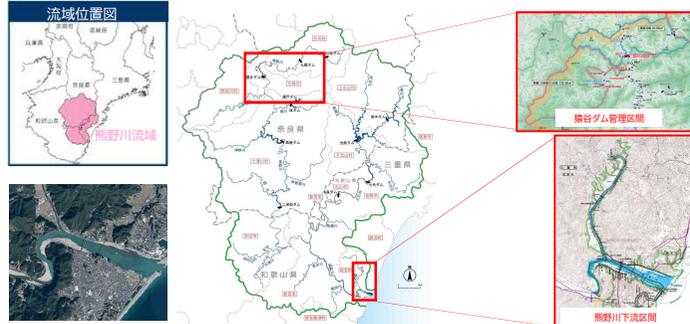
- ・今後30年間の具体的な河川整備の内容を示したものです。
- ・学識者等からなる熊野川懇談会や関係住民・関係県知事からのご意見をいただき令和4年3月（2022年）に策定に至りました。

河川整備計画の5大項目

- 気候変動の影響により頻発化・激甚化する水災害から地域を守る
- 持続可能な総合的な土砂管理を実現する
- 世界遺産の川にふさわしい河川環境を保全、継承する
- 人と河川との豊かなふれあい、交流を育む
- 将来の流域の変化に備える

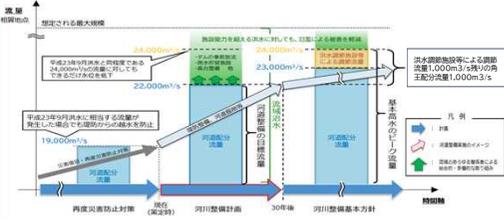
熊野川の直轄管理区間

■新宮川水系熊野川の直轄管理区間は、熊野川が河口から5.0km、相野谷川が5.7km、市田川が2.0km、猿谷ダム区間が10.88kmの合計23.58kmです。



河川整備基本方針と河川整備計画との関係

■本整備計画では、新宮川水系河川整備基本方針で位置づけた目標に向けた段階的な整備として、豊かな河川環境等に配慮しながら河川整備を進めます。



■本整備計画の目標
 ・基準地点相貫において22,000m³/sの流量を安全に流下させる。
 ・流域内の既存ダムにおける効果的な事前放流を行うための取組を進める等により、洪水時の最大流量が平成23年9月洪水と同程度である24,000m³/sの流量に対しても、できるだけ水位を低下させることに努める。
 ・集水域と氾濫域を含む流域全体で、あらゆる関係者が協働して行う総合的かつ多層的な治水対策を推進し、避難態勢の構築等により、人命・資産・社会経済の被害軽減を図る。

熊野川流域の概要

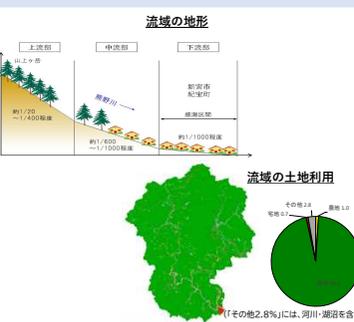
■水害の歴史

■熊野川の流域では急峻な山岳地形が多くを占め、加えて本州有数の多雨地帯であることから洪水が発生しやすく、過去から土砂災害や水害を繰り返してきました。特に、平成23年9月に発生した紀伊半島大水害では、熊野川本川および支川相野谷川の氾濫により甚大な被害が発生しました。

発生年月日 (発生年)	降雨 量(mm)	最高水位 (m)	最大流量 (m ³ /s)	主な被害形態 (被害地域)	被害状況
昭和22年8月 (1947年)	-	-	-	相水地区 (熊野川)	死者・全壊1,017戸、半壊524戸 死者・102戸発生。半壊400戸 床上浸水1,152戸、床下浸水731戸
昭和34年9月 (1959年)	326	18.4	19,000	相水地区 (熊野川)	死者1名発生 床上浸水2,784戸、床下浸水1,464戸 床上浸水512戸、床下浸水200戸
昭和57年8月 (1982年)	356	10.42	10,400	西水地区 (熊野川)	床上浸水205戸、床下浸水245戸
平成2年8月 (1990年)	316	12.96	17,100	西水地区 (熊野川)	床上浸水177戸、床下浸水40戸 床上浸水40戸、床下浸水90戸
平成6年9月 (1994年)	393	11.99	15,100	西水地区 (熊野川)	床上浸水315戸、床下浸水1,052戸
平成9年7月 (1997年)	542	12.57	15,400	西水地区 (熊野川)	床上浸水170戸、床下浸水23戸
平成12年8月 (2000年)	511	11.74	14,000	西水地区 (熊野川)	床上浸水42戸、床下浸水7戸
平成15年8月 (2003年)	400	10.98	11,500	西水地区 (熊野川)	床上浸水34戸、床下浸水14戸
平成23年9月 (2021年)	1,200	18.00	24,000	相水地区 (熊野川)	床上浸水2,142戸、床下浸水1,160戸 死者・4名発生、全壊400戸、半壊400戸 死者・47名発生、全壊46戸、半壊3,276戸 床上浸水3,414戸、床下浸水4,917戸
平成29年10月 (2017年)	411	12.11	14,400	西水地区 (熊野川)	床上浸水270戸、床下浸水65戸

■流域の地形、土地利用

■熊野川流域では、森林が約95.5%、水田や畑地等の農地が約1.0%、宅地が約0.7%、その他が約2.8%の土地利用となっています。



■流域の観光資源

■熊野川流域の歴史は古く、流域には熊野三山等の世界遺産や海峡、川舟下りなどの観光資源が豊富にあります。



新宮川水系（熊野川）河川整備計画

～今後30年間の河川整備に向けて～

概要版



国土交通省近畿地方整備局 紀南河川国道事務所

持続可能な水災害対策を総合的に展開し、世界遺産である熊野川流域の風土、景観、歴史を将来の世代につなぐ

□ 持続可能な総合的な土砂管理を実現する

土砂の生産量が多く河道域、ダム域、河口域および海岸域への土砂動態に影響を与えることが課題であり、既往洪水の影響を踏まえ関係機関が連携した安全・環境・利用面からの持続可能な総合土砂管理を実現します。

【上流部】

■上流部の土砂生産域では、主に森林管理者および治山・砂防事業者による山腹崩壊・土砂流出抑制対策を実施しています。



【中流部】

■中流部では、主に河川管理者(県)による河道管理(陸上掘削等)やダム管理者による貯水池掘削を実施しています。



【下流部】

■下流部では、主に河川管理者(国)による河道管理(河床や砂州の掘削等)や海岸管理者による海岸の侵食抑制対策を実施しています。



□ 気候変動の影響により頻発化・激化する水災害から地域を守る

気候変動の影響を念頭に、豊かな河川環境や風土、歴史等に配慮しながら、流域内のあらゆる関係者が協働して、総合的かつ多層的な治水対策を展開します。

耐震対策



射田水門

堤防整備



堤防整備イメージ(新潟市相筋地区)

内水対策



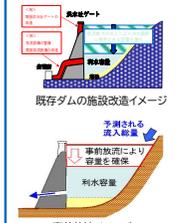
市田川排水機場増強イメージ

河道掘削



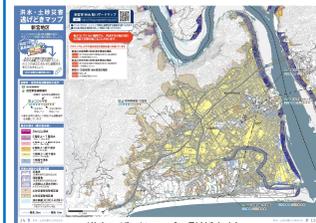
河道掘削イメージ(平面図)

洪水調節機能の強化

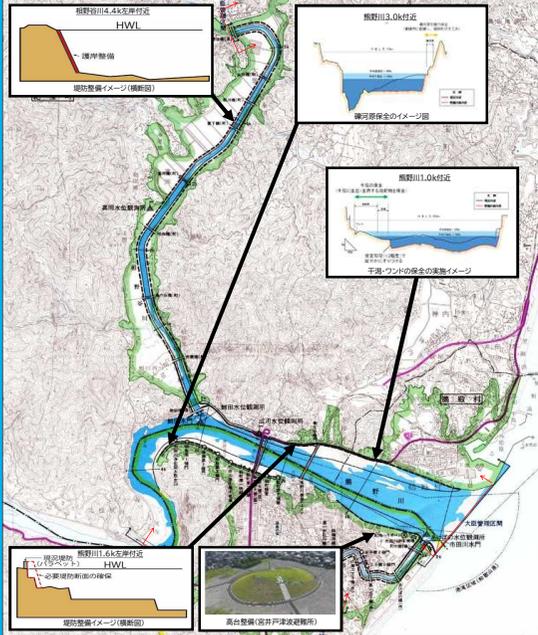
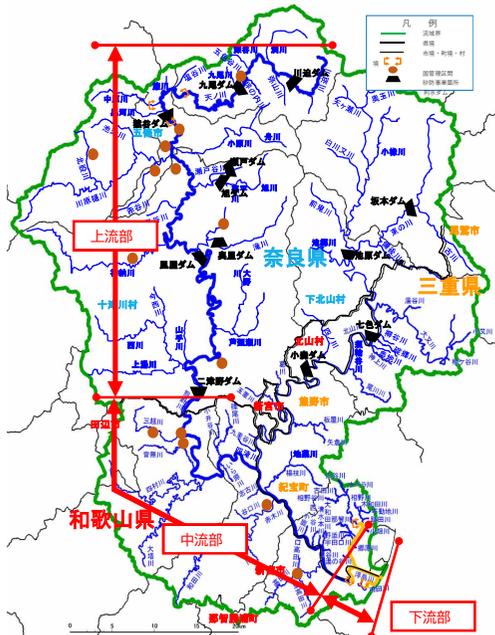


事前放流イメージ

危機管理



洪水ハザードマップの例(新潟市)



□ 世界遺産の川にふさわしい河川環境を保全、継承する

多様な動植物が生息・生育・繁殖できる河川環境を保全し、熊野三山など今なお息づく歴史文化の継承を目指します。

維持管理

■災害の発生防止のため、河川管理施設等を監視・点検し、その機能を維持します。地形状況等を把握でき、三次元データを活用するなどDXを推進し、河川管理の高度化、効率化を目指します。



堤防点検の様子

三次元管内図(DXの推進)

生物環境



礫河原に生息する生物 干潟・ワンドに生息する生物

水質保全・濁水



濁水の発生状況(熊野川(十津川)と北山川の合流点)

□ 人と河川との豊かなふれあい、交流を育む

まちと川が一体となった空間形成、自然とのふれあいや環境学習の場を整備・保全します。



河川清掃 (左:熊野川 右:市田川)

□ 将来の流域の変化に備える

水理・水文や土砂移動等の観測、調査を継続し、気候変動に対して降雨、流出特性、河川生態等への影響を把握します。



熊野川河口部砂州の経年変化